

作品名	移りゆく風景と水族館 ー場所性の再編による 「伊豆・三津シーパラダイス」改修計画ー	作品番号	1/5
校名	芝浦工業大学		
氏名	井上紗慎		



移りゆく

風景と

水族館

ー場所性の再編による
「伊豆・三津シーパラダイス」改修計画ー

「場所性」の再発見・再認識

風景が移りゆく中で、かつて見た何気ない日常の光景や故郷の姿に感じる「その場所らしさ」とは何だろうか。

「場所性」というまちの個性は、そのまちの資源である。

そこでの記憶の集積は徐々に埋没し過去のものとなり、時代に抗い同じ姿のまま残ることは難しい。

では、これからの時代において、**新しい建物や街並み**が**その場所らしい風景の一部と認識されることはできないだろうか。**
時代の移ろいとともに場所性を更新することで、そこでの空間体験や、まちの人、訪れた人の記憶の集積を後世に継承しつつ、
風景が時代によって異なる姿で生き生きとあり続けることができると考える。

本提案では、新しい建物や空間をこれからの「その場所らしさ」になりえるものと解釈し直し、
そこに潜在する場所性を顕在化させることで、これからの風景のあり方を考えた。



❖海と山のまち「内浦」



誇りある風景

静岡県沼津市内浦地区。ここでは豊かな自然環境と美しい景観と共に、人々は古くから漁業と観光業で暮らしてきた。間近に山々が迫り内浦湾を囲むこの地域では、**海・淡島・富士山**を一望できる。この風景が、住民が誇る内浦地区の強い場所性である。

古くからの観光地

まちには 100 年以上の歴史をもつ旅館や城跡、「伊豆・三津シーパラダイス」という水族館など複数の観光スポットがある。主要地方道である沼津土肥線が海沿いに走り、伊豆地域との強い交通ネットワークがある。

❖3つの価値をもつ「伊豆・三津シーパラダイス」



歴史

国内 2 番目の長さ

前身の中之島水族館が 1930 年に開業して以来、「みとしー」の愛称で親しまれ、国内 2 番目の歴史の長さとなす多くの日本・世界初の飼育実績を誇る、水族館史において重要な施設である。

建築

清家清による設計

1977 年に清家清による設計で現在の姿にリニューアルされた。当時の革新的な構法であったトラス構造が特徴的である。部分改修や一部施設の閉鎖によって施設内は変化し続けている。

経済

地域の観光産業の軸

古くから観光地として親しまれてきた沼津市で、地域経済を長年支えている。

❖伊豆・三津シーパラダイス≠内浦らしさ

住民にとっての内浦らしさ＝

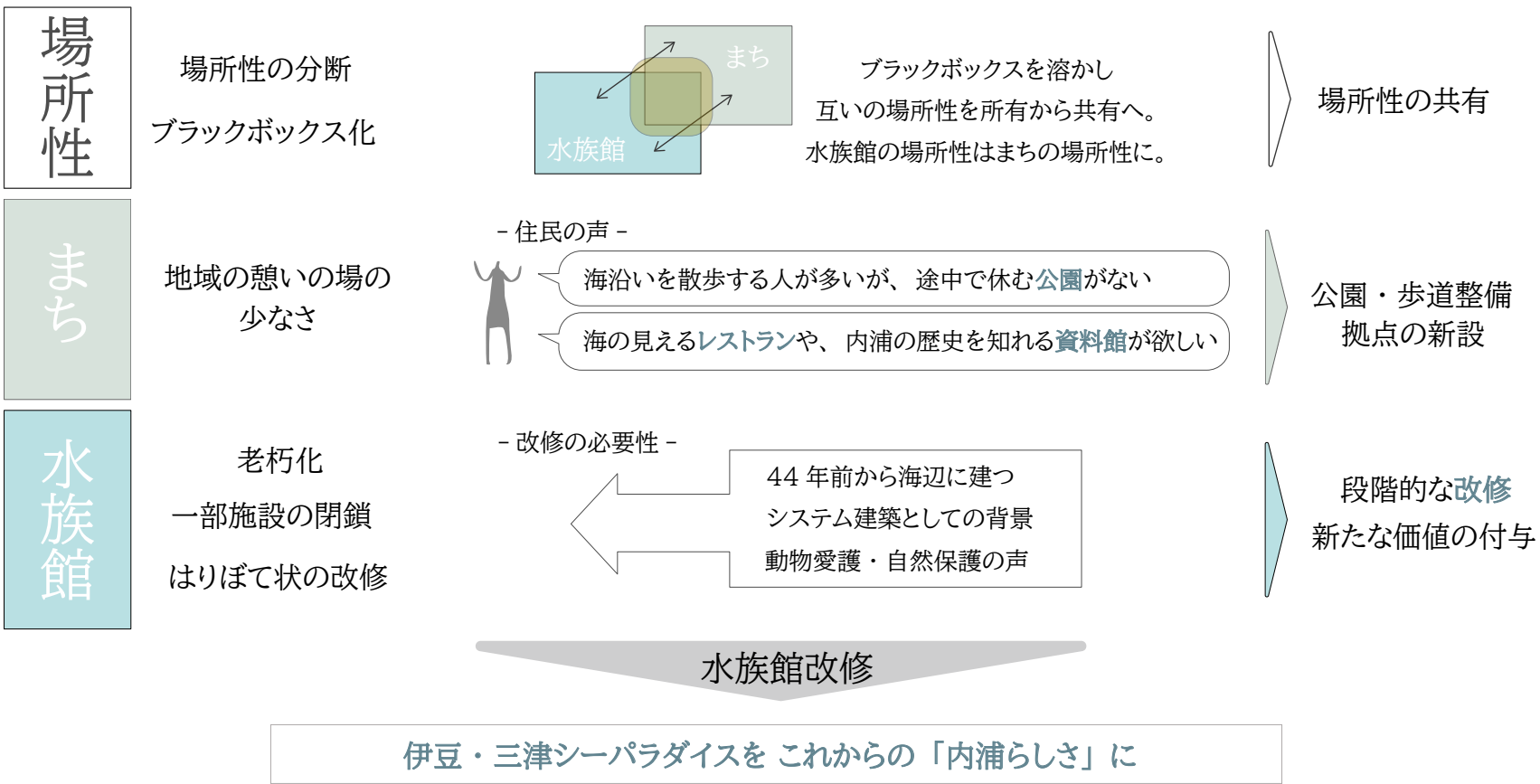


住民に対するヒアリングの結果、「伊豆・三津シーパラダイス」は住民にとって「**内浦らしさ**」を感じる**存在ではない**ことがわかった。トラスなどの建築的価値の認識は一部の住民に留まり、長い歴史と確かな価値がブラックボックス化し、未だに「新しい施設」として認識されている。

❖これからの「内浦らしさ」を考える

この地に水族館ができて 90 年以上、現在の建物になってから 40 年以上経過し、当たり前存在になれどこの近代建築は風景の一部として認識されていない。地元の人々の生活から切り離され、観光客のためのレジャー施設として認識されていることで、**まちと水族館それぞれが誇る場所性は分断されている**。

この現状に対し、この水族館が今後の「内浦らしさ」の一部として認識されるようになることで、水族館という機能だけではなく価値が付与されと考える。また、これからさらに街並みが変わっていく中で、場所性を更新することによって「内浦」というまちに対する人々の愛着も次の時代に続いていくのではないだろうか。



従来の水族館内部だけの改修工事ではなく、ヒアリングから見出した公園整備などの街のニーズに応える役割も兼ね、現状のブラックボックスを溶かすことで、複合的解決を目指す。これにより、この**水族館は「内浦らしい」風景の一部**となり、人々が日常の中で価値を再認識することを目的とする。

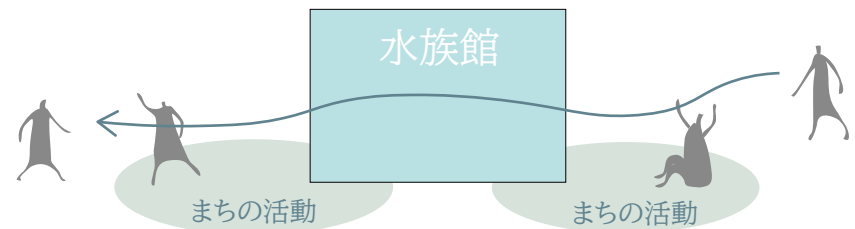
①まちの**風景**として拓く

水族館



水族館の建物や内部での活動が、住民やここを訪れた人々が「内浦らしさ」を感じる風景の構成要素となる。

②水族館の**空間体験**を拓く



水族館だけが所有していた空間体験を、まちの人々が日常の中で体験できる。そこで見えるもの、聴こえるものは、まちと共有され人々の生活の一部となる。

❖内浦の風景と活動

ヒアリングから得られたもの以外の、内浦地区の場所性を調査する。

見え方

見えるもの

空間体験

□2 種類の道

隙間の風景の連続

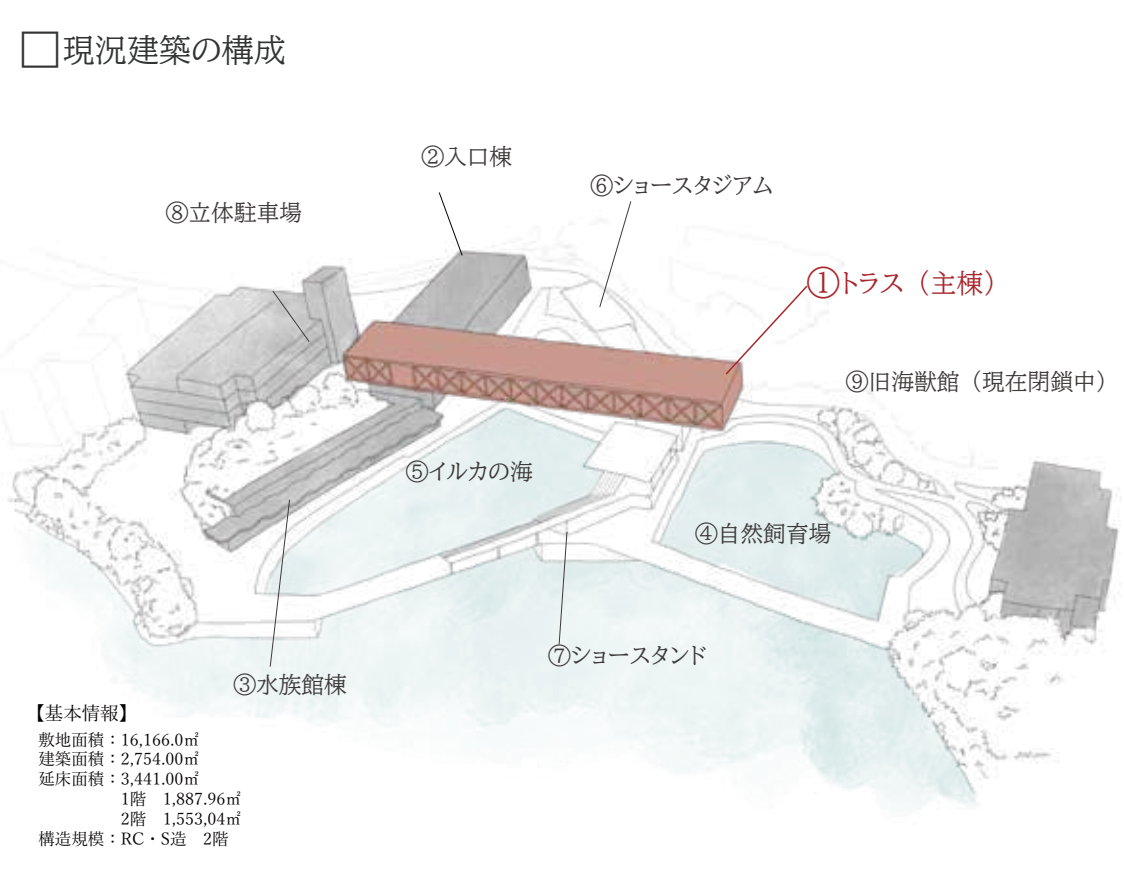


❖伊豆・三津シーパラダイスの風景と活動

場所性の抽出と、現況の問題点を探る。



□現況建築の構成



【基本情報】
敷地面積：16,166.0㎡
建築面積：2,754.00㎡
延床面積：3,441.00㎡
1階 1,887.96㎡
2階 1,553.04㎡
構造規模：RC・S造 2階

□地域資源としてのトラス

海と繋がる自然の入り江を利用したイルカの海に、大スパン架構のトラス が架かる。清家清の特徴がよく現れたこの建物は、伊豆・三津シーパラダイスの象徴である。本提案では、トラスを最も強い水族館の場所性とし、その見え方やそこの空間体験をまちの風景と活動の一部にすることで再編を行う。

トラスの場所性を再解釈

見えるもの

見え方

空間体験

↓

↓

↓

富士山や街並みのように

建物間の隙間のように

散歩道の途中の街並み

まちと連続した感覚で、水族館の場所性を感じる空間
＝ブラックボックスが溶けた状態

❖全体構成



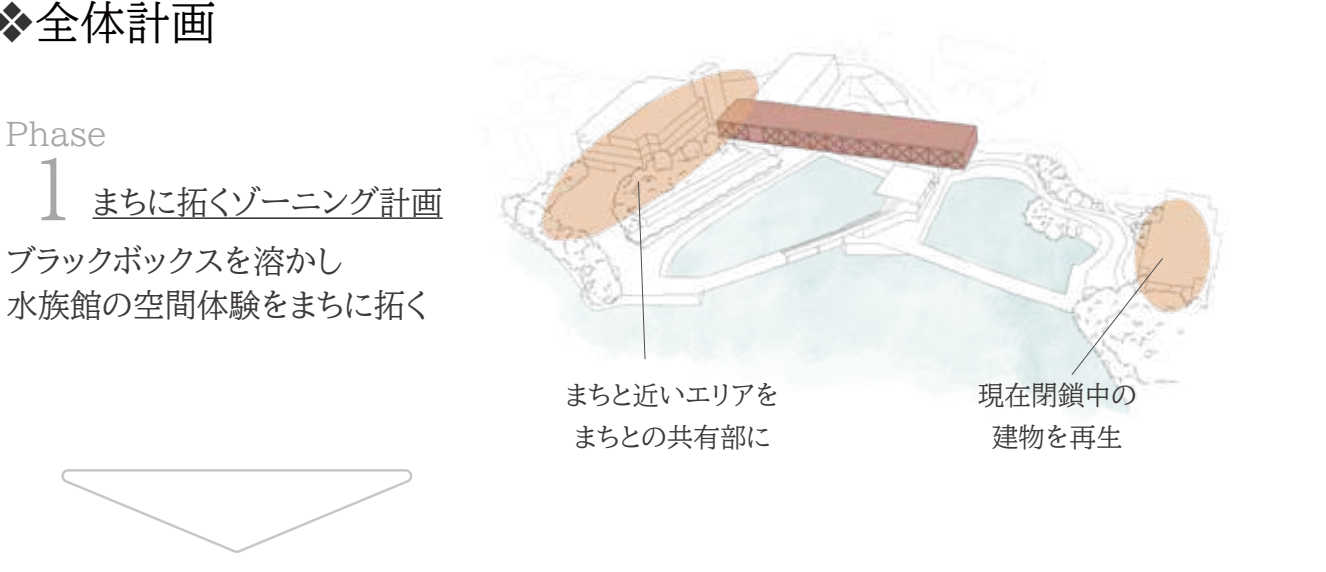
❖全体計画

Phase 1

1

まちに拓くゾーニング計画

ブラックボックスを溶かし
水族館の空間体験をまちに拓く

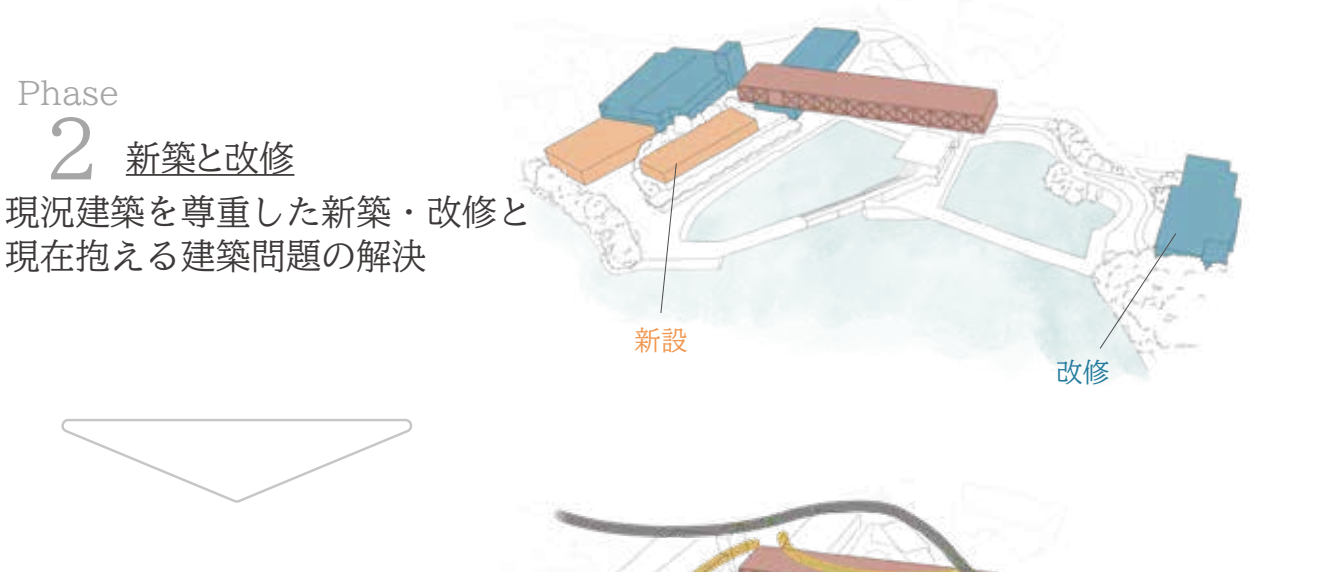


Phase 2

2

新築と改修

現況建築を尊重した新築・改修と
現在抱える建築問題の解決



Phase 3

3

拓いた水族館を繋ぐ

現在行われている線としての活動で
点と点は繋がる



07 CHANGES OF SCENETY 変化した風景

作品名	移りゆく風景と水族館 -場所性の再編による 「伊豆・三津シーパラダイス」改修計画-	作品番号	4/5
校名	芝浦工業大学		
氏名	井上 紗慎		

①水族館の玄関は、まちの公園に



Before
入口棟の後ろにトラスが隠れている

入口棟の減築



水族館のサウンドスケープと内浦のランドスケープがトラスの元で溶け合う。
隣のショースタジアムから聴こえる賑わいの音は、内浦の日常の一部になる。
拓かれた空間は水族館の玄関であり、まちの憩いの場として利用される。

②トラスが新しい「内浦らしさ」に



Before
フェンスにより空間は分断

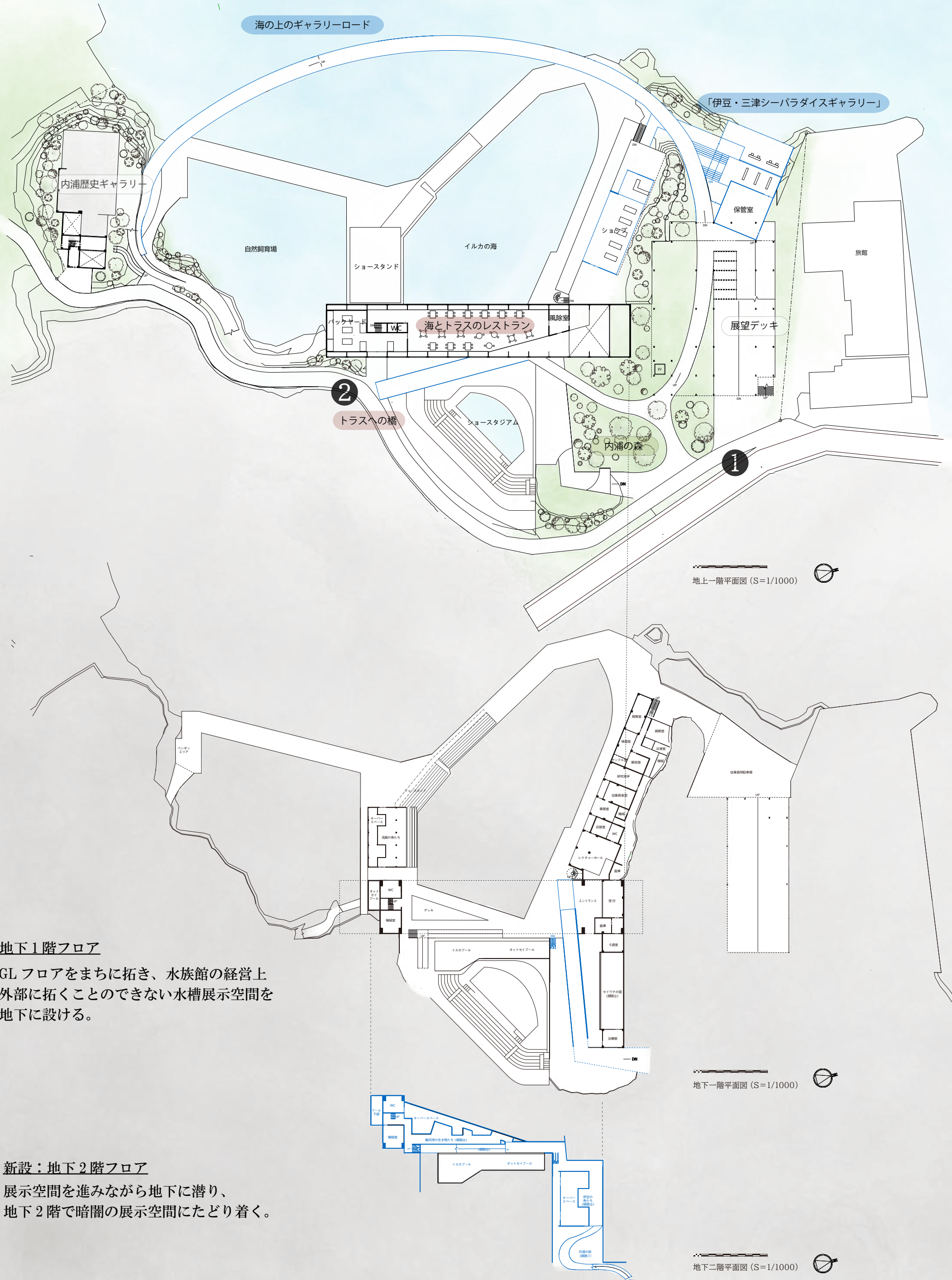
橋を架ける



外からトラスへ続く橋が架かる。ショーの音を聴きながら奥へ進んでいく。
まちと繋がったレストランとして生まれ変わったトラスは、
住民と観光客が集まるランドマークとなる。
トラスによって切り取られた三角の海の景色、トラスの中の人々の活動、
空間体験はまちの場所性として新たに認識される。



見え方と
空間体験の共有



作品名	移りゆく風景と水族館 -場所性の再編による 「伊豆・三津シーパラダイス」改修計画-	作品番号	5/5
校名	芝浦工業大学		
氏名	井上紗愼		

③まちと海を繋げるギャラリー

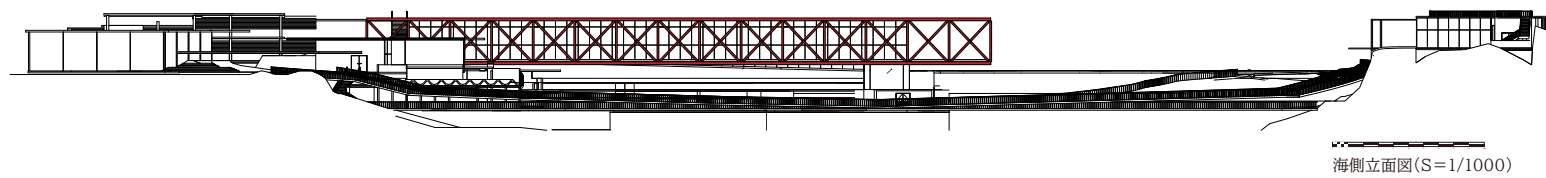


内浦の森を抜け、海に向かう。歴史ある水族館のギャラリーはその途中にあり、まちの日常に取り込まれる。水族館の歴史に触れながら、散歩道の休憩所として使用されるギャラリーでは、この地の誇りである海への眺望も展示の一部になる。

④海の上の新しい日常



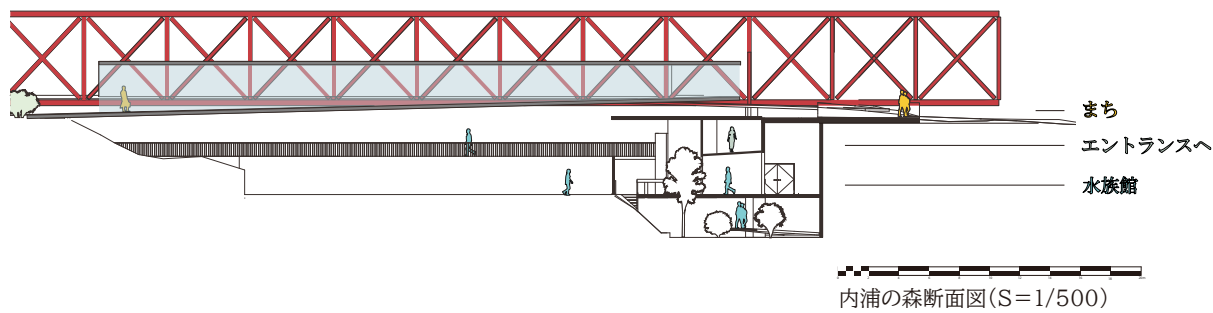
海から山を眺めることは、水族館だけが所有している風景であった。
橋が架かり、まちの活動は海の上へ溢れだし、水族館はまちの活動に囲まれる。



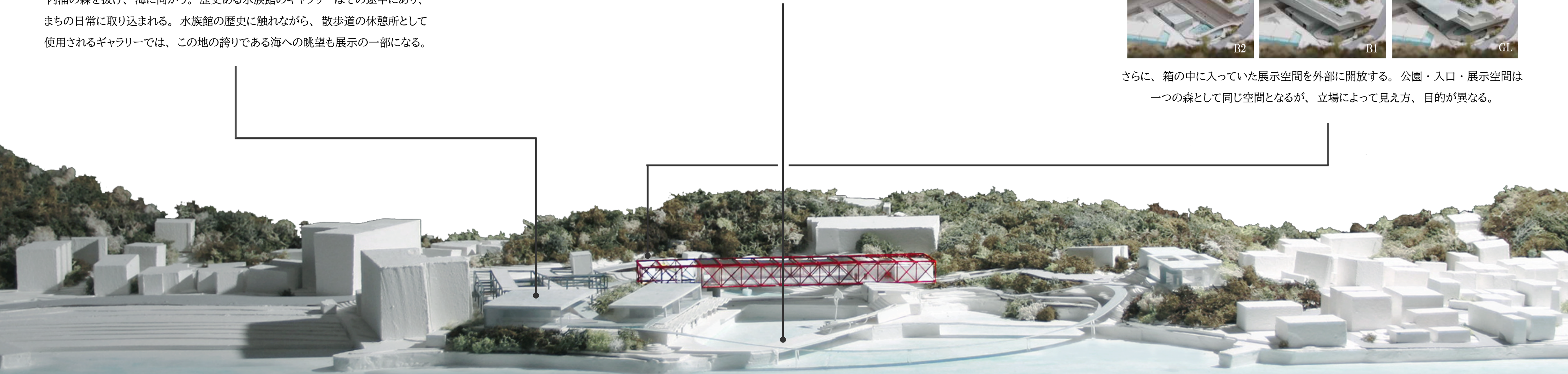
⑤まちから水族館へ



森の中を進むと水族館へつながるトンネルがある。
奥には海が見え、ラスの下のエントランスに向かってショーの音を聴きながら進んでいく。



さらに、箱の中に入っていた展示空間を外部に開放する。公園・入口・展示空間は一つの森として同じ空間となるが、立場によって見え方、目的が異なる。



本計画により、「伊豆・三津シーパラダイス」がもつ場所性が、内浦で当たり前に見える風景と日常的に行われている活動の一部となる。
街と水族館を跨いだ日常での人々の記憶の集積は、潜在している場所性を街の資源として再認識するだけでなく、この場所の新たな価値を生む。
このように場所性を不易流行に認識することで、住民が誇りに思い、ここを訪れる人々が内浦らしさを感じる風景がこれから先も生き生きとあり続けることを願う。